OCLC の相互貸借サブシステム

The ILL Subsystem of OCLC

栗原進一*

杏林大学医学図書館

I. はじめに

OCLC は、北米・中米・アジア・オーストラリア・ヨーロッパ・中東の26ヶ国に1万以上の会員を擁する世界最大の図書館情報ネットワーク・書誌ユーティリティである。1971年から他の書誌ユーティリティに先駆けてオンラインシステムを運用しているが、1979年4月からはさらにオンラインの相互貸借サブシステムを提供するようになった。

相互貸借サブシステムには常に改良が加えられており、現在は1984年2月に完成した Version 3 でサービスが行われている。本論文では、日本からは利用できないためにこれまでほとんど紹介されることのなかった、OCLC オンライン相互貸借サブシステムについて述べる。

II. 相互貸借準則

米国では相互貸借は、業務の円滑化を計るため、アメリカ図書館協会が制定する相互貸借準則 (National Interlibrary Loan Code) に従って行われている。その初版は1917年であるが、米国で実際に相互貸借が行われるのは1920年代に入ってからである。

現在は1980年版が最新で、これによれば、所蔵館の調査は National Union Catalogue や Union List of Serials で行い、書誌事項を完全かつ正確に記入した相互貸借依頼状を送付することと、あるネットワークの加盟館が自分の所属するネットワークの外に相互

貸借を申し込む場合には、まず近隣の館、次に同じ州内の館、さらに近隣の州の館、それでだめだった場合にはじめて国立図書館や研究図書館に申し込むという申し込み先の順位が定められている。

専門分野別や地域別の館種グループネットワークの相互貸借準則にもこの規定は盛り込まれており、全ての館がこの準則を守っている訳ではないというものの、實際上相互貸借はまず近隣館どうしや公式に同意がなされたグループ内でなされ、それを越えて行われる場合には、原則として相互貸借準則に従って行われてきている。

III. OCLC の相互貸借サブシステム

1. システムの概要

OCLC の相互貸借サブシステムは、OCLC のオンラインシステムと通信ネットワークを利用して、相互貸借依頼を電子的に発信する、相互貸借専用に関連された一種の電子メールシステムである。

相互貸借依頼館はオンラインデータベースで書誌事項と所蔵館を確認すると、

- 1) まず書誌データを相互貸借申し込み用のフォーマットに自動転記する。
- 2) 書誌データごとに所蔵館が州単位あるいは州内の地域単位で表示されるので、申し込みたい館5館まで順番に3桁のコードでマニュアル入力する。(申し込みたい館とその順位は lender string と呼ばれる)
- 3) 謝絶された場合、あるいは受け付けた館が4日間何の処理もしないと自動的に次の優先順位館へ再申し込みがなされる。
- 4) 借り館の名称や住所などは自動的に入力される。
- 5) 依頼状の発送は電子的かつ瞬時になされる。

* Shin-ichi KURIHARA : Kyorin University, Medical Library, 6-20-2, Shinkawa, Mitaka, Tokyo 181, Japan.

受け付けた館は、一件ごとの処理状況（受付済・処理中・処理済・発送済・一時保留・謝絶）をコードで入力するので借り館は何時でも申し込んだ分の処理状況とその処理日を把握できるし、入手日の予測もつくようになっている。さらに面倒な相互貸借処理統計も自動的に作成される。

OCLCの相互貸借サブシステムを利用して、毎日1万件以上、1988年一年間では370万件以上が処理されている。

なおILLサブシステムを利用してUMI（University Microfilms International）・CAS（Chemical Abstracts Service）・USBE（Universal Serials and Book Exchange）などの機関に依頼をすることも可能であるし、1984年10月からはBritish Library Document Supply Centerが、1987年1月からは米国議会図書館がOCLC-ILLサブシステムと接続し、相互貸借サービスを提供するようになっている。

2. システムのメリット

OCLC-ILLサブシステムは利用者にとっては、

- 1) 書誌事項の不完全なリクエストでも受け付けてもらえる。
- 2) 依頼は相手館に瞬時に伝達され、さらに受け付け館は休日を除く4日以内に何らかの処理を行うことが要求されるのでリクエストの入手が早くなる。
- 3) 未着のものは現在どういう状況にあるかいつでも確認できるので到着時期の予測がつくというメリットがある。

依頼する側にとっても、

- 1) これまでよりはるかに大量のトランザクションを正確かつスピーディに処理できるようになった。
- 2) 書誌事項の不完全・不正確なリクエストでも多面検索ができるので照合は容易にできる。
- 3) 5館まで申し込み先を予め入力できるので、謝絶の場合の再入力の手間が省ける。
- 4) 端末を運用するための技術は覚えなければならないが、その訓練はOCLCのブローカーである地域ネットワークでやってくれる。

5) 操作上不明な点は詳細なマニュアルがあるのでそれで調べたり、マニュアルを読んでわからない場合はいつでも電話で問い合わせたりできる。

6) 書誌データは自動転記できるのでタイプミスや転記ミスがなくなる。

7) 自館の住所・館名は自動的に入力される。（マイクロエンハンサでは返送用シールとして出力可能である）

8) これまで殆ど書誌ツールを持たなかった小規模の館でも大規模館と同様の正確な依頼送付ができる。

9) 近隣の中小規模館の所蔵がわかるので、遠くの大規模館に依頼する件数が減る。（ILL準則にも適うし返送にかかる日数も短くなる）

10) これまではコピーか現物あるいは謝絶状が送られてくるまで結果が判らなかったが、オンラインILLは何時でも申し込んだ分の現状がわかる。

11) 作成に手間のかかるILLの統計レポートをシステムが自動的に作成してくれる。

等々のメリットがあり、さらに受け付ける側としても、間違いのない依頼が送られてくるので、作業もし易く返送も早くなることが挙げられる。

3. システムのデメリット

OCLCの相互貸借サブシステムの欠点としては、

- 1) 自動転記できないデータ（雑誌論文の書誌データや所蔵館コード）や受け付けたトランザクションの処理状況をマニュアルで入力しなければならないが、その入力の際にミス（いわゆるヒューマンエラー）が発生する危険があること。
- 2) 受け付け館が発送済のコード入力を忘れると、システムが4日後に次順位館へトランザクションを転送するので、二重にコピーが送られてくる危険があること。
- 3) 謝絶を行う場合、その理由の提示ができないので、謝絶を受けた館ではその後の処理に困ってしまうこと。
- 4) 主題による検索及びブル代数による検索ができないこと。

などがあげられる。謝絶理由は近い将来入力可能と見る見込みであるし、また主題による検索及びブル

代数による検索も可能となるよう OCLC ではシステムを改善中である。

4. Group Access Capability

OCLC では1984年7月から、OCLC 会員以外の図書館がグループを形成して、グループ内だけで相互貸借を行うために ILL サブシステムを利用することを認めている。この機能を Group Access Capability (以下 GAC) と呼ぶ。グループの各館は予めその所蔵データを OCLC のオンラインユニオンカタログに登録しておく必要がある。

グループアクセス館の相互貸借の方法は、

- 1) OCLC に VAN か CompuServe 経由で接続する。
- 2) オンラインユニオンカタログを検索してグループ内の所蔵館を確認し相互貸借依頼状を発信する。
- 3) もしグループ内に所蔵館がない場合は、OCLC の正規の会員館を経由して、OCLC 会員の所蔵館へ相互貸借依頼状を発信することも可能である。

なお OCLC の通常の ILL サブシステムと GAC の ILL サブシステムとは全く分離して運用されており、現在15グループ1500の館がこのシステムを利用している。

5. Front End Soft と端末

OCLC では1984年1月から相互貸借マイクロエンハンサ (Interlibrary Loan Micro Enhancer) と称する、相互貸借業務の能率をあげるために開発された前置ソフト (Front End Soft) を提供している。利用できるのは Apple II, IBM PC, M300 (IBM PC をベースにしたワークステーションで OCLC の標準端末) の3機種で、1987年3月から提供されている Version 3 が最新である。

その特徴は、オフラインのバッチ入力が可能なこと、自動送信・自動受信が可能なこと、受信メールから自動的に返信用シールが生成されることである。

OCLC のユーザは、一日に何回か OCLC に接続してメールボックスに入っている受信メールを引き出したり、送信メールを送る必要があるが、ILL 用のマ

イクロエンハンサを利用すれば自動ダイヤルアップ・自動ログオンが可能となり、システムが予めプログラムされた時間、例えば終業後などに自動的にメールを送信・受信するようのできる、昼間のワーキングアワーには端末を他の業務に使うなど効率的に利用することが可能である。

また受け付け館は受け付けた個々のトランザクションごとに、受付済・処理中・処理済・発送済・一時保留・謝絶のコードと料金、現物貸し出しの場合の返却期限日の入力が必要であるが、マイクロエンハンサプログラムを利用すれば、処理コードとトランザクション番号を纏めて入力可能で、現物貸し出しの場合の返却期限日の自動入力が可能となっている

IV. 相互貸借電子化の影響

相互貸借の電子化は参加館にいろいろな影響を及ぼしつつある。受付数は館種や館の規模に関係なく増加しているが、これまで印刷体のものには載っていなかった中小規模館の最新の所蔵データが収載されているため、以前は借りだけでほとんど貸しのなかった館で貸しが急増し、受付件数を減らすためにサービスの有料化にふみきっている例があり、それがまた無料提供館への申し込みを増やす結果となるなど、貸しパターンが大きく変化している。貸し館の範囲は以前より遙かに広がっており、大学図書館が学校図書館から借りる例も多く、また専門図書館の貸しも以前よりずっと増えているという。

これまで相互貸借の常識として、大規模館はネットでは貸し館であり、小規模館はネットでは借り館であると考えられてきた。しかしオンライン ILL の統計を調べると必ずしもそうとは言えない傾向が現れてきている。却って大規模館がネットの借り館となり、小規模館がネットの貸し館となっている例が多く報告されるようになってきている。これは、これまで大規模館としては利用を諦めていたものが、中小規模館の所蔵データが利用可能となって相互利用が顕在化してきたためであろう。

相互貸借業務は以前は特殊な調査照合能力が必要と

されていたが、現在では OCLC の地域代理機関が行う短時間のトレーニングで、誰でもある水準まではこなせる作業へと変わってきている。今まで内部で行われてきたトレーニングは地域ベンダーが代わって行ってくれるようになり、以前は教えてくれる人も答えてくれる人もいなかった難しい問題でも、OCLC が作成した詳細なマニュアルを読むか、電話で問い合わせれば簡単に答えが得られるようになっている。照合はキーが少なくても素早く探せるし、自動転記できるデータについては転記ミスも無くなった。照合と発信は簡単になり、業務量が増えても充分に処理可能である。

V. おわりに

OCLC の ILL サブシステムは確かにすぐれたシステムであるが、また幾つかの欠点もかかえている。そのうちには改良可能なものもあるし、そうでないものもある。

欠点の一つとしてヒューマンエラーへの対応があげられる。例えば受け付け館が発送済コードの入力を忘れたために、システムが自動的にリクエストを lender string 上の次の館へ発信してしまい、コピーが複数の館から送られてくる危険があげられる。これを防ぐために依頼館自体も受取済のコードを入力してそのリクエストをシステムから除くようになっているが、郵送中のタイムラグなどのためこの方法は必ずしも有効とはいえないようである。

OCLC ではシステムの改良のためにユーザの代表(実際は OCLC の地域ベンダー)から構成される各種の諮問委員会を設けており、ILL サブシステムについても、その諮問委員会が常に改善意見を出している。現在 ILL サブシステム諮問委員会では、受け付け館が 4 日以内にリクエストに応じなければならないのを、

lender string に依頼先として 2 回入力することによって 8 日以内と改めることを検討中である。

RLIN で目録レコードを作成し、OCLC にテブロードしていない幾つかの大規模研究図書館のレコードが欠如していることは現在の欠点であるが、将来 LC・RLG/RLIN・OCLC・WLN のコンピュータとデータベースを接続する Linked Systems Project が完成すればその欠点も無くなり、よりタイムリーでずっと正確な本当の意味でのユニオンカタログやユニオンリストがオンラインで利用可能となり、さらに全国的なオンライン相互貸借システムが完成することになろう。

参考文献

- 1) Brown RCW. OCLC の現状と将来 — 特別講演会記録 — 学術情報センターニュース 1986 ; (2) : 1-7.
- 2) Ede SJ, Wheatley ML. The use of micro-computers in interlibrary lending. Interlend Doc Sup 1985 ; 13 (3) : 63-70.
- 3) 栗原進一 OCLC のオンラインネットワーク. 医学図書館 1988 ; 35 (4) : 256-62.
- 4) Learn LL, Carpenter GL. The OCLC network : its architecture, application, and operation. Libr High Tech 1988 ; 6 (3) : 43-60.
- 5) Networking in transition : current and future issues. ed by Chris Sugnet. Libr High Tech 1988 ; 6 (4) : 101-19.
- 6) Virginia B. The impact of OCLC on interlibrary loan in the United States. Interlend Doc Sup 1987 ; 15 (3) : 74-9.